

「日本主義」者としての保田與重郎

私が、保田與重郎の名を知ったのは、連載一回目でも少し触れたが、高校生の時であった。(多分、松本健一の著書を通じてだろう。)

大学入学後、その全集を図書館で見付けたが、その晦渋な文体ゆゑ、文脈を辿ることすら難しかつた。だが、竹内好や橋川文三、桶谷秀昭や福田和也らの諸論考の助けを得て、ある程度は読み進めることができるやうになつた。

しかしながら、「読むこと」と「研究すること」の間には少なからぬ相違がある。受動的な色彩が強い前者に対し、後者は、明確な方法意識を打ち立てた上で、対象に問ひかけることが必要とされる。(当然、方法意識に対する不断の問ひ直しも必要だが…。)

にもかかはらず、大学院進学当時の私は、方法意識が曖昧であつた。私が所属してみた学部《総合人間学部》も、進学先の大学院《人間・環境学研究科》も、「学際的」を旗印にしてみたせいか、良く云へば「自由」、悪く云へば「いい加減」な雰囲気があつたせいかも知れぬ。

当初は、一九三八年一月に創刊された『新日本』といふ雑誌に目を向けた。この雑誌は、盧溝橋事件の直後である一前年の七月一八日に、内務官僚出身の松本學が後援し、佐藤春夫らを中心とする文壇・論壇人が組織した《新日本文化の会》といふ団体の機関誌である。自身も所属してみた保田によれば、「所謂文學者の國策的團體活動といふものの最初のもの」で、「會は自づからに鬭争的性質をもたざるを得ぬ進路をとつた。この十四年の四五月ごろではすでに文藝や文化の領域からさらに政治的意見の深みに入つた對立が會内部で明らかになつてゐた」(『「文學の立場」覚書』)とされる会の実態を、機関誌を中心に検討しやうと考へたのだ。

けれども、その対立軸が見極められないのである。今から思へば当たり前のことで、そんな小手先の作業からは何も生まれない。

行き詰まつた私は、自身の内面を見極めやうとし、一つの結論に達した。自分は「右翼」的であると自他共に認めてゐるが、「右翼」とは何か。自分が保田に関心を持つたのは、彼が「右翼」とされてゐたからではなかつたか。ならば、自身に内在する筈の「右翼」的なるものを参照しつつ、保田に迫るよりほかはない。

このやうな見地より、従前の保田論、「日本浪漫派」論を読み直してみると、一つの問題が浮かび上がった。驚くべきことに、保田と「右翼」的なるものとの関わりについて、影山正治などの「右翼」関係者を除けば、十分な言及がなされてゐなかつたのである。保田を「右翼」と見なして否定的に捉へる側にしろ、保田を「右翼」と見なさず肯定的に捉へる側にしろ、「右翼」的なるものに関する既成のイメージを自明の前提として、その内実を具体的に検証せぬ。この問題が、「文学史」と「思想史」との挟間に位置してゐる上に、「思想史」の分野においてすら、「右翼」に対する知識層の嫌悪感を背景としてか、「右翼」的なるものの研究が非常に立ち遅れて来たのである。

研究の立ち遅れは、「右翼」といふ呼称からも窺へる。周知の通り、この語は、フランス革命後の議会において、穏健派が議長席から見て右側に席を占めた史実に由来する翻訳語だが、同時に蔑称ともいふべき色彩を持つ。さらに、「右翼」的なるものは、ナショナリズムやファシズムと結びつけて語られがちだが、これらの言葉もまた、論者によつて様々な意味を付与されてをり、分類指標たり得ない。要するに、全てを問ひ直さねばならなかつたのだ。

その拠り所とすべきは、何と云つても、同時代の認識であらう。例へば、『文藝春秋』の昭和十二年五月号に掲載された『日本主義メンタルテスト』といふ時評において、保田は「日本主義」者と見なされてゐる。保田自身も、『我國に於ける浪漫主義の?観』（昭和十五年八月筆）において、「日本浪漫派」の文学運動と「日本主義」者のテロルとを重ね合はせたばかりでなく、昭和十四年二月から、影山を中心とする《日本主義文化同盟》の機関誌・『怒濤』に寄稿し、翌年一月には同盟に正式参加してゐる。

このやうな事実に鑑みるなら、「右翼」ならぬ「日本主義」者としての保田像を描き得るのではないか。保田が、一部の「日本主義」思想に否定的な態度を示してゐたことは確かである。とは云へ、その内実を個別具体的に検討すべきではなからうか。私は、そのやうに考へた。

その後は、どうにか研究を進めることを得て、昨年一月には、修士論文・『「日本主義」文學論序説—日本浪漫派の再検討を目指して』を提出した。今は、影山における「日本主義」を考察すべく、彼の全集を繙いたところである。